

第3分科会記録

テーマ「特別支援学校（知的障害）高等部における知的障害の状態が比較的軽度の生徒への支援」

企画趣旨説明者：菊地一文（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主任研究員）

研究報告者：工藤傑史（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所総括研究員）

話題提供者：眞部知子（福島県養護教育センター所長・前福島県立会津養護学校校長）

尾崎祐三（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員・
前東京都立南大沢学園校長）

中田正敏（明星大学特任准教授）

竹林地毅（広島大学准教授）

司会（第1部）：涌井 恵（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主任研究員）

コーディネーター（第2部）：菊地一文（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主任研究員）

第3分科会第1部では、はじめに菊地主任研究員より本分科会の趣旨について説明を行った後、工藤総括研究員より平成22-23年度に実施した関連研究についての概要報告、上記2名の実践報告があった。

工藤総括研究員は、平成22-23年度専門研究B「特別支援学校（知的障害）高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究－必要性が高い指導内容の検討－」の研究成果を報告し、本研究で実施した調査結果について、概要説明を行った。

眞部氏、尾崎上席総括研究員は、特別支援学校高等部における教育課程の特徴・工夫とその成果を報告し、各報告の後には活発な質疑応答が行われた。

第2部では活発なパネルディスカッションが行われた。最後にまとめとして、菊地主任研究員より、様々な変化の中で生き抜く子どもたちの必然性ある学びの重要性が述べられた。（以上、要項P.22参照）

〈第1部・実践報告への質疑応答〉

参加者：余暇指導の実際について伺いたい。

眞部氏：とりたてて枠組みを設定しては指導していない。部活動で対応している。

尾崎：部活動中心に対応している。部活動は原則全員参加。将来に生かす学びという視点が重要である。

参加者：眞部氏に質問。生徒をグルーピングする際、保護者からのクレームはないか。

眞部氏：保護者の希望もあるが、十分に説明しており、特に苦情はない。

参加者：眞部・尾崎両氏に質問。朝学習の教育課程上の時間数・単位計算について、またキャリア教育や自立活動、個別の教育支援計画との関連性・工夫についてはどうか。

眞部氏：国語・数学等の時間として換算している。キャリア教育・自立活動についても記載している。

尾崎：全教育活動がキャリア教育。個別の教育支援計画については関係機関との連携を作成・明記。

参加者：行事の際に特別時程はあるのか。その際、問題は発生しないか。

眞部氏：教科的な要素を含むということで、朝自習の時間に文章を書くという形で対応している。自立活動やホームルームも、担当が工夫しながら対応している。

〈第2部・パネルディスカッション〉

菊地：眞部・尾崎両氏には補足及び実践上の課題について伺いたい。中田氏には高等学校での取組の工

夫、竹林地氏にはコメントを頂きたい。

眞部氏：課題は①生徒一人一人の教育的ニーズに応じた、子どもたちが満足する学習内容の取り入れ、②市内特別支援学級から入学してくる子どもたちの自己肯定感の向上、③社会的スキルやコミュニケーション力の向上の3点である。

尾崎：実際の生活に結びつく内容を学習することが課題である。生活指導は、一人一人異なる生活状況に寄り添うことが大切。二次的な障害が突然出る子どももいるため、学級担任は、周囲の先生や関係機関に相談することが重要である。

中田氏：徹底的に話をし、解決策を探るという方法を採用している。放課後の補習は大学生による対話形式。頭髮指導よりも、公共物破損を重大視して指導。学習支援は少人数指導。外部資源を活用した就労支援を実施している。

竹林地氏：教育課程編成に際しては、改善の理由について職員の共通理解が必要である。授業づくりについて、従来の教員と新転任者の専門性を高めるための方策はどうか。また地域との連携の工夫についても伺いたい。さらに中田氏にはファシリテーター型校長になった経緯を伺いたい。

尾崎：初任者には指導教員による OJT。ポイント、留意事項、対応方法等、テーマごとにワークショップ型で従来の教員とともに研修を実施している。作業等は必ず地域と連携した教育活動を実施している。

眞部氏：教育課程は毎年反省が必要である。授業づくりの前に「立ち話」が大事。コミュニケーション力・協同する力は専門性にもつながる。地域との連携について、清掃班は地域の企業からの講師招聘、普通高校との交流及び共同学習を実施している。

中田氏：研究授業は「ほめことば」を中心としたメモを渡す。ビデオを撮って見ると、「生徒は学ぼうとしているがきっかけがつかめない」と気付く。教員の質が保たれているのは、お互いの対話なしには成立しない学校だからであり、対話により生徒も変わり、教員も変わる。私が校長時代に、ファシリテーター型校長になったのは、最前線でがんばっている先生たちのエネルギーを支えるためにはファシリテーターにならざるを得ないという事情。

竹林地氏：教育課程は、学校の看板・メニュー・目標である。目標がわかりやすい言葉で書かれているのは良い。校外学習型作業学習は生徒にとって緊張感があり、声をかけてもらえるので良い。年間計画はロードマップ。教育課程をうまく編成し見せること、内容の示し方や区切り方の工夫も大切で、「社会貢献をする子どもを育てる」というのは効果的である。今こそ特別支援学校が培ってきたノウハウ、学校の学習と職場実習とのつながりを高等学校に発信してもいいのではないか。授業力と専門性については、結局は授業研究と事例検討になる。ここでも協働が求められる。特別支援学校だけでは難しい問題もあるので、ぜひ中学校の先生に「こういう子どもを育てようと思っている」と、高等部をアピールしてほしい。進路の展開という面でいうと、検定やアビリンピックは効果的。お互いに他校の生徒を応援しあい、その姿に感動し、特別支援学校の先生になりたいという学生もいる。発表の場を作るという意味でも地域に出かけるのは大事である。

菊地：知的障害の状態にかかわらず、教え込みでない必然性のある授業をとおして、主体的な学びを引き出すことが重要である。このことは学習指導要領解説に示されている知的障害のある児童生徒に対する教育的対応の基本とも重なる。教師はそれを支援することはもちろん、自身にもその姿勢が求められ、常に「なぜ・なんのため」を教員間で言語化することが大切である。社会は変化しており、その中で生きている子どもたちにとってより必然性がある学びの工夫が求められる。